

本を選ぶ

NO.429 2021年(令和3年)2月20日

●発行／ライブラリー・アド・サービス

<http://www.las2005.com>

本社 〒335-0004 埼玉県蕨市中央 5-20-1 TEL=048-432-3726

- <ろん・ぼわん> Ruby -続-
- 司書の眼 第43回
- 学問の自由は身近な問題である
- 鳥の目 83
- 図書館を離れて (第51回)

●●●●●ろん・ぼわん●●●●●

Ruby -続-

前回の続きで活版印刷の植字工程と組版について、当時の職人の苦労を思い起こす。

原稿の段階では元原稿になかった振り仮名が初校で赤字となって振られたら、少々厄介だ。一旦組み上がった初校のゲラ(校正紙)を校正者が読んでみて、読み難い漢字や古い言葉などに振り仮名を振る指示を校正紙に書き込めば、それに従って小さな仮名の活字を埋め込む作業が必要となる。仮名を振る対象の文字は親字と呼ばれる。縦組みの場合、親字の右側の行間には決められたサイズにぴったりの幅のインテル(空白を作るための込め物)が入っているが、それを部分的に崩して振り仮名用の小さな活字を入れ込んで組み替えなくてはならない。

振り仮名用の小さな活字は印刷の現場ではルビ活字と呼ばれ、部分的に振ると「ぱるルビ」、すべての漢字に振り仮名を振れば「総ルビ」と呼ばれる。また体裁上、親字1字毎に打つルビはモノルビ、親字が複数で全体に振ればグループルビとなる。

印刷所に出張校正で出かけた際、そもそも何故ルビと呼ぶのか職人に尋ねてみたら、さあね昔からそう言っているからね、とあっさり返された。後日、再校に行ったらこの職人が調べてくれたら

しく、ルビーなんだとよ、と言う。どうして貴石の名前が付いたのか、物知りの職長が教えてくれたようだ。その昔に活版印刷技術が日本に導入された頃、イギリスの活字は大きさ毎にエメラルド(6.5ポイント)、パール(5ポイント)、ダイヤモンド(4.5ポイント)などと呼ぶ習慣があったという。ルビーは5.5ポイント。一方で、日本では本文用活字の標準は5号、ポイントにすれば10.5ポイントになる。そしてルビを振る際、半分の大さきの7号の活字を用いた。ポイント換算では5.25ポイントになる。1ポイントは0.351ミリだからその差は僅かで、ルビー活字にほぼ相当する大きさになる、そんな事情があり、7号をルビ活字と呼ぶようになり、やがて「ルビを振る」となったと。ふーん、なるほど。

植字の職人は大工さんのように賢くなくてはならない。一度決められた本文の組み体裁は謂わば設計図。細かな計算を必要とする。ゲラに「ルビ」と赤字を入れられると、行間の寸法は守ったまま、インテルを入れ直さなくてはならない。1ポイント単位でインテル切りで切り出して調整していく。もちろんルビ活字を拾って、校正指示の出たルビを振っていくという細かな作業が続く。

ルビと言っても、振り仮名とは限らない。「紳士」という2文字の単語を「ジェントルマン」と読ませる指示などもあり得るが、職人は動じてはならぬ。さらに行間の作業はルビだけではない。くせ者が控えている。傍点だとか、圏点、ゴマ、黒丸など。なにせ日本語の組版はややこしいのだ。(埜村 太郎)

司書の眼 第43回

－ネガティブ・ケイパビリティ、そして共感－

鷹野 祐子

「わかったつもり」

帯木蓬生著の「ネガティブ・ケイパビリティ 答えの出ない事態に耐える力」(朝日選書 2017年)を読んだ。ネガティブ・ケイパビリティとは、「どうにも答えの出ない、どうにも対処しようのない事態に耐える能力」をさす。性急に証明や理由を求めず、不確かさや不思議さ、懐疑の中に居ることができる能力を意味するという。帯木蓬生氏は精神科医で、主な著書に「閉鎖病棟」(山本周五郎賞受賞)などを書く小説家でもある。現在は福岡県でメンタルクリニックを開業している彼が、この「ネガティブ・ケイパビリティ」という言葉に出会ったのは「米国精神医学雑誌」に載った「共感」についての論文だった(Margulies A. Toward empathy: the uses of wonder. Am J Psychiatry. 1984 Sep;141(9):1025-33. doi: 10.1176/ajp.141.9.1025. PMID: 6465381.)。この論文ではイギリスの詩人キーツの兄弟への手紙が引用されており、シェイクスピアがネガティブ・ケイパビリティを有していたとキーツは言っていたという。事実や理由をせっかちに求めず、不確かさや不思議さや懐疑の中にとどまっていられることこそ、共感の土台になる。シェイクスピアはそれを駆使して多くの作品を世に出したと。人の脳は「わからないもの」を「わかろう」とする生物としての方向性が備わっていて、さまざまな社会的状況や自然現象・病気や苦悩に対して、私たちは色々な意味付けにより、理解しわかったつもりになろうとする。わけのわからないもの、不可思議なもの、嫌なものが放置されていると脳は落ち着かなり、人々は自分の脳が悩まなくても済むように、「わからないもの」を「わかったもの」として片付ける。

しかしこの「わかったつもり」は理解をごく低い次元にとどめてしまい、より高い次元の理解まで発展していかない。まして作りだした理解が誤っていれば、悲劇はさらに深刻になる。そこで、どのようにも決められない、宙ぶらりんの状態を回避せず耐

え抜く能力であるネガティブ・ケイパビリティが必要とされているのだ。著者はこれを色々な角度から説明してくれている。

まずイギリスの詩人キーツについて語り、そしてキーツを見出した精神科医ビオンの生い立ちから、精神分析におけるネガティブ・ケイパビリティを語る。そこからいくつかの例をあげて、現在の社会でネガティブ・ケイパビリティの必要性がどのような形で実感されるのか述べている。セラピー犬、終末医療、身の上相談、伝統治療師、プラセボ効果、芸術家の認知様式、小説家、詩人、精神科医。シェイクスピア、源氏物語を書いた紫式部、現代の教育現場が養成する行き過ぎたポジティブ・ケイパビリティへの危機感、不登校の子が発揮するネガティブ・ケイパビリティ、政治、そして不寛容の先にある戦争。最後に「共感」という言葉の支えとなるネガティブ・ケイパビリティについて語っている。新書で254頁の本だが、話題が多岐にわたり読むのに時間がかかってしまった。源氏物語を書いた紫式部を師と仰ぐ小説家の源氏物語続編は大変面白かった。本全体が幅広い教養と知識に支えられているので、それぞれに明るくない人には読みにくいかもしれない。こういう本をよむと、筋肉や体の柔軟性と同じように、日々教養を蓄える必要性を感じる。専門分野しか知らないという人は、これからの世の中のあいまいな話についていけないであろう。しかしまさにこの能力こそがネガティブ・ケイパビリティ、性急に証明や理由を求めずに不確か性、不思議さや懐疑の中に居ることができる能力なのではないかと思う。

青い竜と赤い蛇

古田足日は「おしいれのぼうけん」や「ロボットカミィ」などを書いた児童文学者である。年末に図書館から借りた本の中に「へび山のあい子 赤い矢と青いほのおの物語」(童心社、1987年)という児童書があった。子どもの読みものとしては珍しいB

5判の長編読み物で、表紙にはナイフをもって立つ少女、穴の中の子ども達、怖い顔の竜が鉛筆画で描かれている。この本で一番たくさん登場するのは、コンビナートと蛇と竜である。コンビナートが身近にない人にはあまり実感がわかないが、田畑精一の描くコンビナートは、おそらく瀬戸内を想定しているようだ。対面の島の丘の上から見下ろす煙突やガスタンク、それらにつながるパイプがひしめきあっているような工場地帯の絵である。各章の大きな絵と各ページの挿絵、平易な文章と漢字のルビによって、主人公の小学3年生と同じくらいの小学校中学年の児童が読む本に位置づけられている。副題から察するように、赤い矢と青いほのおは、人間の中にある善と悪、思いやりと人を疎んじる心というように設定されており、成長過程である中学年の葛藤をよく表している。

物語は、太古に若者が誕生するところから始まる。そして時を経て小学3年生のアイコは、同級生にイじめられ、唯一理解してくれていた仲の良い友達を助けることができなかった。子どもたちそれぞれにも背景があり、小学6年生の竹村さんは、向かいのコンビナートで働くお父さんが病気になり転校していく。物語は人間が太古の昔から持っている心の中の青い竜と赤い蛇の戦いと一緒に進んでいく。青い竜にさらわれるのを助けられたあい子は、赤い蛇の元で眠る。

「あい子よ ねむれ あい子の上に 花 ふり
つもれ 木の葉 ふりつもれ 土 ふりつもれ
みどりのいのち めをふくまでに」

青い竜は他人のしあわせを考えようとする人間心の心がつくりだす人間のくるしみによって力を蓄え、赤い蛇は人間の幸せが力を与える。そして、赤い蛇は花や木の葉、土につつまれる古墳で長い時間をかけて傷をいやし、青い竜は人のことを考えない子どもたちを腹の中で溶かし傷口をふさいでいく。この本でもやはり「共感」という感情がネガティブ・ケイパビリティに支えられていることを暗示している。

昨年秋に画家の津田櫓冬（つだろとう）さんが亡

くなった。いぬいとみこさんの『トビウオのぼうやはびょうきです』などたくさん絵本や児童文学の挿絵を描かれた。以前お住まいの調布市が図書館業務委託について検討しているときに、市民団体を立ち上げ民営化に反対される運動をされた。それ以来長く図書館にかかわっていらしたと聞く。私が参加している「障害に関することを描いた子どもの本のリスト」を作成する研究会にも参加されており、最近の表紙画を担当して下さっていた。とても気さくな方で、例会にはいつも新聞記事をお持ちになり、戦争や社会問題について熱く語って下さった。散歩道で拾った落葉をコラージュして素敵な裏表紙にしてくださったときもある。毎回の例会でお会いできることがこのまま続くと思っていた。まだまだお話しでき、障害をもつ子どもたちのために一緒に仕事ができると思っていた。最後にお会いしたのは、2020年の夏に32号の表紙をお持ちくださった時だ。いつものようにニコニコとお話しされ表紙を置くと早めに帰られた。その後完成品をお届けするのに連絡した際、娘さんから、津田さんが長い間病に伏されていて、起き上がるのもやっとの日々だったと、あの日も無理を押して来て下さり、それ以来ベットから起きることもできないでいるとお聞きした。その後引き取られた娘さんの家でなくなり、あまりに突然の別れであった。こういうことが年を取るほどに増えていく。

Do the hokey pokey

昨年末鬼滅の刃の映画を子どもと見に行った。煉獄杏寿郎が瞬きをしないのがどうも気に入らなかったが、ストーリーはさておいて、現代の子どもたちがこれだけ熱狂する映画を見られてよかった。映画の主人公、竈門炭治郎はまさしく努力によって何かを成し遂げようとする人であり、自分にはできるという自信がある。そしてそれを助けているのが、炭治郎のまわりの人への「共感」であり、まわりの人からの「共感」である。なぜかへび山のあい子と炭治郎は似ているなど思うのである。

（たかの ゆうこ：医学系研究所図書室）

学問の自由は身近な問題である

— 『学問の自由が危ない』 —

安藤 聡

この1月に、日本学術会議問題についての論考集『学問の自由が危ない——日本学術会議問題の深層』（佐藤学・上野千鶴子・内田樹 編）を担当しました。この問題の背景にあるものはなにか、学問の自由とはなにか、なぜそれが重要なのかを、識者の方々にご寄稿いただいたものです。

本書の刊行にあわせて、編者のひとり、内田樹先生に、販売促進の一環として、「職人」としての学者は、この件については一歩も譲らない」という原稿をご寄稿いただき、小社のnoteで公開しました。そこで言われているのは、学者たちがなぜこの問題に対しては徹底的に抗戦するのか、その理由についてです。

かいつまんでその内容を紹介しますと、大学はこの20年間、政権と文部官僚に揺ぶられてきました。成果主義の導入、課せられる膨大な事務作業、予算削減で脅し、研究しなければ自分で金をとってこい、成果が出なければいつまでも非常勤。教授会の権限はなくなり学長のトップダウン体制となり、大学の自治権は有名無実となった。文部大臣が一声かければ大学人はひれふす、そんな構図が続いていたというわけです。

今回の任命拒否も、菅政権は政権発足の景気付けニュースとして、政府に批判的な意見を持つ学者たちに一発かましてやるか、くらいの気持ちだったのでしょうか。ところが思いもよらず、猛反撃をくらった。なぜか。学者というのは、大学という組織のなかの一員である以前に、自分の仕事に誇りをもつ職人でもあるから、というのがその理由です。

職人の世界は腕次第。お互いの仕事の質を見て、評価しあう一種のギルド的な共同体。そこで問われるのは、あくまで仕事の質の面での序列であり、組織上のヒエラルキーは関係ない。

だから、大学の一員としての教員は、文部省の命令に唯々諾々と従っても、職人としての学者はそんなものは屁でもない。それよりも研究を高いクオリ

ティで極めることのほうが上だと考えている。予算を削るだの、飛ばしてやるだのの恫喝には屈しない（上野千鶴子先生は今回の本のなかで、「学者は権力ではなく、真理にのみ仕える」とおっしゃっています）。そのことを政権は見逃していたのではない

か、というのが内田先生のお話でした。そこから敷衍するならば、我々出版人も、一種の職人であるということです。出版界で働く我々は、それぞれ多くの場合、営利企業の社員であるわけですが、一人一人をみれば職人でもある。たとえば編集者であれば、どんな本を作ったか、作った本がどれだけ質の高いものだったか、それがどれだけ多くの人に届くものだったか、それだけで評価されるわけで、年が若いとかベテランとか、会社の役職がどうかは関係ない。あくまで仕事の質で評価される世界です。会社組織のヒエラルキーとはまた違う価値観で生きている。

出版社もマスコミと同様、政権から疎まれたり睨まれたりしやすい存在です。それゆえ、たいして意味があるわけでもない価格の総額表示義務などで、揺さぶりをかけられたりして、実際それで右往左往させられてもいます。でも、それは会社員としてのことであって、職人としての出版人は、自分の仕事に誇りをもっている限り、それをないがしろにするような圧力には屈しない、あるいは屈してはならない。そうしたことを、この本の編集を通じて、あらためて確認させてもらった気がします。

これは私が出版界で禄を食む人間だから、出版人のこととして考えたわけですが、同様に生活人としての矜持を持って働く市井の人々にも言えることだと思っています。学術の世界から遠いところにいるように思える人にとっても、学問の自由が身近な問題であるということ。それを実感できたことが、今回の本の編集を通じて得た私の知見です。願わくば、この知見を多くの読者と共有できますことを。

（あんど う あきら：晶文社）



『学問の自由が危ない』
／佐藤学・上野千鶴子・
内田樹 編／四六判並製
／304頁／定価：本体
1700円＋税／晶文社/
2020年1月刊

鳥の目 83

一手のひらから飛び立ったスズメ

為貞 真人

コロナ禍による「ソーシャルディスタンス」「ステイホーム」などの行動変容で、多くの人が孤独や孤立にさいなまれている中で、思い出されるのが人間とスズメとの「ふれあい」のいくつかの記録です。

ひなの入院

その一つに、北海道斜里郡で野生動物の保護・治療・リハビリに取り組む獣医で、写真家、エッセイストの竹田津実さんの『家族になったスズメのチュン』（1997年／偕成社刊、2006年／偕成社文庫）があります。

竹田津さんの診療所では、牛や馬などの家畜やペットのほか、カラスやキツツキ、キツネやタヌキなどの野生動物が入院します。「鳥獣保護管理法」が保護のためでも許可なく野生の鳥獣を飼養することを禁じているのを、獣医の筆者はよく承知の上ですが、助けてほしいと信号を出している動物はみな診ることにしています。

1993年8月、暑い日の朝、建具職人の木戸君が野球帽に入れて持ち込んだのは、両翼になる筆羽が生え始めたばかりの小鳥のひなで、少しも動かず、首も翼もダラリと下にのびたままです。駐車場に風に飛ばされて落ちていた巣の5羽のひなのうち生きているという1羽です。

奥さんがカメラが入っていたダンボールの底にシーツを敷き、隅に小さなプラスチックのボトルの湯たんぽを置いて小さな「入院室」を用意しました。ひなを入れるとペターッとへばりついたかっこうで動かさずしません。治療は水分の補給からはじまりました。スポーツドリンク剤に抗生物質を入れてスポイトでくちばしを濡らしましたが飲みません。くちばしをこじ開けて飲ませ、液がスーとのどの奥にはいっていくとのどがヒクヒクと動きました。3日目には大きく口を開けて餌を欲しがるようになりました。

小箱の「入院室」が置かれた部屋にはすでに入院

患者がいました。エゾアカゲラ、エゾモモンガ、シマリス、ノビタキそして一頭のキタキツネです。チュンはこれら患者にも大口をあけ大声で餌をせがみます。入院4日目で筆羽がのびて間違いなくスズメとわかり、「チュン」と名づけられました。竹田津さん夫妻は自然に帰った場合のために親鳥が運ぶ餌と同じようなミミズ、チョウヤガの幼虫、クモ、バッタの採集を始めました。

家族になったチュン

6日目、体中に羽毛が生え、10日目には「入院室」から飛び出し、窓際の植木に止まり、近くを通過する生き物に両翼を半分広げてこぎざみにふるわせ口を大きく開けて鳴きます。リハビリ中のノビタキからは部屋に放したガを追っかける飛行を教わりました。ノビタキが自然に帰りチュンは飛行や虫取りの先生を無くしましたが、この機会にパンなどの味を教えることになり、家族の食事どきの食卓はパンやごはんが、もそもそ動くバッタやクモがゴチャゴチャになって大騒ぎです。

当時、リハビリをうけた動物たちは退院し、残ったエゾアカゲラも退院したばかりです。しかし自然の中では餌がうまく取れないとみえ、元患者たちはよく里帰りして、窓わきのイタヤカエデの幹をトントンとたたきます。最初は窓を開けて餌を与えますが、いつまでも頼りにしてもらっては困るので、無視する回数を増やします。その代わりイタヤカエデに餌台を設けたので、一日中いろいろな鳥やリスが遊んでいます。チュンは窓ガラス越しによくそれを見ていました。

手のひらの記憶

32日目の秋風が吹く日の夕方、里帰りしたエゾアカゲラに窓を開けて餌のワームを与えているとき、チュンがバタバタ、スーッと窓を抜けて林の中に消えていきました。チュンはまだ自然の中で生きるには小さすぎます。いくら呼んで探し回っても、暗いエゾマツの林はサワサワと葉音がしているだけ。

翌朝、奥さんの手のひらの中でチュンが小さくなってもどってきました。嬉しそうに（7頁〜*）

図書館を離れて (第51回)

—「いく」と「ゆく」⑥—

並木 せつ子

前回は戦後生まれの人々を見てきた。大正生まれと戦前生まれは「いく」と「ゆく」の間で揺らんでいる人が多かったが、戦後生まれにもしばらくはその流れが続いた。しかし1960年代生まれあたりから“「行く」と「いく」を使い分ける”派が主流になって「ゆく」が減り、また一人の人が「いく」と「ゆく」という二つの言葉の間で揺らぐことも少なくなった。そして場所的移動には「学校へ行く」のように漢字を使い、時間的経過には「生きていく」のようにひらがなを使う、という流れもほぼ定着したように見える。もちろん漢字の「行く」だけ派も、「行く」「ゆく」の使い分け派も、ひらがなだけ派もいるけれど、もはや個性と言えるだろう。

今も「行方」「行く行く」「行く先」などの慣用表現は「ゆく」と読むが、時の流れとともに変化していくかもしれない。既に「行く先」は『広辞苑(第5版)』の項目に「ゆくさき」と「いくさき」両方が取りあげられている。「よそ行き」も同様に「よそゆき」「よそいき」の両方が項目としてあがっているが、戦前生まれの「行く」「ゆく」派・向田邦子と「行く」「いく」派の黒柳徹子が共に「よそゆき」なのに対し、戦後生まれの「行く」「ゆく」派・姫野カオルコは「よそいき」と書いているのが象徴的である。

1885年生れの野上弥生子から1992年生れの辻堂ゆめまで44人の女性の著作を1点ずつ見てきた。一人の著者でも著作年代や対象が違えば文章も違ってくるので一概には言えぬが、「ゆく」から「いく」への大きな流れを見ることはできた。残念なのは、「行く」と漢字で書いている部分を、それぞれの著者、特に野上弥生子や幸田文のような漢字しか使わない人たちが、どう読んでいたのかわからなかったことである。

途中、「いく」と「ゆく」という二つの言葉だけにこだわって調べることに何の意味があるのかと立ち止まることもあったが、字面を追っていくという退屈な作業の中で、内容を追って読んでいた時には気づけなかった文章の個性——文字や文体の違い、

言葉の使い方の癖、何よりも文章から立ち上ってくる佇まいのようなもの——を、より鮮明に感じ取ることができた。予想外の収穫であった。

この連載を読まれた方からお手紙をいただいた。そう言えば…という感じで教えてくださったのは、都はるみの「小樽運河」という曲に《四十路半ばの秋が逝き》という歌詞があり、最初にははっきりと「あきがゆき」と歌っていたが、9年後には「あきがいき」とも聞こえるような歌い方になっている、ということだった。

そこで「行く」の入っている歌に思いを巡らしてみた。まず浮かんだのが「丘を越えて」の《丘を越えて行(ゆ)こうよ》、「異国の丘」の《今日も暮れゆく》、「高原列車は行く」の《高原列車はララララ行(ゆ)くよ》、舟木一夫が歌った「修学旅行」の《汽車はゆく汽車はゆく》だった。思いついたのが古い曲ばかりのせいか、すべて「ゆく」である。

さらに絞り出した曲が、「翼をください」の《この大空に 翼を広げ 飛んで行(ゆ)きたいよ》と、「なごり雪」の《時が行(ゆ)けば 幼い君も》。やはりすべて「ゆく」だった。歌っている人や歌われた時期は戦後であっても、作詞者が戦前から1950年代初頭までに生まれた人だからかもしれない。

もっと新しい曲を探すため『流行歌20世紀』と『オールヒットソング 2018年版』を図書館で借りてきた。最近の曲、昭和の歌謡曲、グループサウンズ、アニメソングなど広い分野の曲が載っている。2冊で全801曲。その中で歌詞に「行く」という言葉が入っているのは約160曲。その中で「いく」と歌っている曲は約19%。「ゆく」の方が多。歌の場合、歌詞に「行く」と漢字で書かれていても、実際に聞くことができるのがいい。「いく」か「ゆく」かははっきりわかる。

「いく」と歌っているのは、安室奈美恵、Mr.Children、Hey!Say!JUMP、ももいろクローバーZ、宇多田ヒカル、いきものがかりなど、若い歌手、若い作詞家に多い。永六輔(戦前生まれ)の作詞した「遠くへ行きたい」は「いきたい」だが、これはむしろ少数派である。アニメソングも「いく」の方が多い。「アンパンマンのマーチ」(やなせたかし作詞)、「夢をかなえてドラえもん」(黒須克彦作詞)、「さんぽ(と

なりのトトロ)」(中川李枝子作詞)など、作詞家の年齢に関係なく「いく」が使われている。戦時下の子ども之歌「兵隊さんよありがとう」も《今日も学校へ行けるのは 兵隊さんのおかげです》の「行ける」が「いける」だった。

「ゆく」の方は、意外にもAKB48、乃木坂46、欅坂46の歌に多かったが、曲の作詞者が秋元康だということで少し納得した。他に若い世代では星野源、ゆずなども「ゆく」が多い。もっと上の世代のシンガーソングライター(五輪真弓、中島みゆき、さだまさし、松任谷由美、桑田佳祐など)も「ゆ

く」が多い。いわんや森繁久彌(「知床旅情」)をや、である。武田鉄矢(「贈る言葉」)も然り。

この2冊の歌集に載っていた曲に限れば「ゆく」の方が断然多い。『NHKますます気になることば』に《詩的な文脈に…「ゆく」が使われることが多い》と書かれているとおりであった。「いく」と歌っている歌手が若い世代に多いということは、先に見てきた本と同じように「ゆく」から「いく」への流れがあるとも考えられるが、無理に結論を引き出すこともないだろう。これはこれで楽しい調べものだった。(なみき せつこ)

(*5頁から) ごちそうをたいらげた後、5時間びくともせずに眠り続けました。それ以来、チュンはチャンスがあれば夫妻の手のひらに入りたがり、手の中で眠るのが大好きになりました。くちばしで指をつつき包み込むようせがみます。

やがて美しい羽毛の成鳥となったチュンは家中をくまなく探索し、紙くずや入院動物の毛を集めて家のあちこちに巣作りをはじめ、奥さんにプロポーズしたこともあります。またチュンはCDのクラシックの音楽に合わせ胸をそらしてさえずる歌の名手になりました。電話の会話、掃除機、洗濯機などどんな音にもリズムを変えて挑戦し、知人の間では全国的に有名になりました。

夫妻はいろいろと退院の訓練をし、何度も強制退

院作戦を試みましたが失敗します。開けた窓から入ってきたハチやチョウを追って外に少し飛び出ただけであわてて部屋に舞戻すほどです。違法状態ですが竹田津さんは強制退院にしのびず、獣医助手(患者の動物はチュンがそばにいれば安心します)や訪問者に真っ先に飛び出す玄関番をさせながら自然に帰るときを待つことにしました。

チュンの物語はここで終わりますが、文庫版の「あとかき」には、1997年9月、チュンはある突発的なことから退院し、9か月家の庭や周辺で生活し、翌年の6月、恋人らしいスズメと数日遊んでいなくなったと、後日談が記されています。

(ためさだ さだと：さいたま市図書館友の会)